

写真を用いた園内研修の方法

－武庫川女子大学附属保育園の取り組み－

Method for In-School Teachers' Development in Early Childhood Education and Care
Using Photographs: An Attempt of Mukogawa Women's University Child Care Center

鶴 宏史，大槻 伸子，大中 美咲

TSURU Hirofumi, OTSUKI Nobuko, ONAKA Misaki

武庫川女子大学 学校教育センター年報

第2号 2017年

写真を用いた園内研修の方法
—武庫川女子大学附属保育園の取り組み—

Method for In-School Teachers' Development in Early Childhood Education and Care Using
Photographs:

An Attempt of Mukogawa Women's University Child Care Center

鶴 宏史* 大槻伸子** 大中美咲***

TSURU, Hirofumi OTSUKI, Nobuko ONAKA, Misaki

キーワード：園内研修 カンファレンス 写真

1. 保育の質と園内研修の必要性

(1) 園内研修の方法

保育所、幼稚園などにおいては活発に園内研修が実施されている。園内研修を行うのは、例えば、『保育所保育指針』の第7章において、「保育所全体の保育の質の向上を図るため、職員一人一人が、保育実践や研修などを通じて保育の専門性を高めるとともに、保育実践と保育の内容に関する職員の共通理解を図り、協働性を高めていくこと」と示されるように、保育の質を高めることが主たる目的の一つである。

このような園内研修については、以前よりその重要性が指摘されつつも、その方法や内容について文字化されたものは少なかった。しかし、2000年以降、保育所や幼稚園における園内研修のあり方・進め方に関する研究や報告、特集が増加している⁽¹⁾。園内研修の方法は、実際の保育を観察した上でのカンファレンス⁽²⁾、保育者によるエピソード記録を用いたカンファレンス⁽³⁾、インシデント・プロセス法による保育カンファレンス⁽⁴⁾、ビデオや写真を用いたカンファレンスなどがある⁽⁵⁾。とはいえ、いかなる方法を用いようとも、「よりよい保育実践をめざして、それぞれが主体的に自らの保育課題や研修の必要性を自覚し、終わった後に仲間に支えられながら自信を持つことができたり『わかった』、『成長した』などの喜びが味わえることが大切」⁽⁶⁾である。

(2) 写真を活用した園内研修

園内研修の方法は多岐に渡ることはすでに述べたが、本稿では写真を活用した園内研修について取り上げる。第一筆者は、武庫川女子大学附属保育園で2013年から2年間、園内研修に加わってきた。その方法は、実際の保育を観察した上でのカンファレンスであった。観察した上でのカンファレンスはそれなりに有効であったと考えるが、必ずしも保育者がある場面を見ていないことや、保育を観察するのは第一筆者のみであり、共有されにくい部分があった点も否めない。そこで、3年目となる園内研修では、写真を活用することで、同じものを見ながらカンファレンスをする方法を導入した。

写真を活用した園内研修を取りあげた文献には、岡（2013）⁽⁷⁾、秋田（2016）⁽⁸⁾、瀧川（2016）⁽⁹⁾などがある。岡（2013）⁽⁷⁾は、創発型の園内研修のツールとして、写真を使用するのもよい方法の一つだと指摘する。写真の使用法とその利点について、「保育で印象に残ったり、よいと思った場面の写

* 教育学科准教授 ** 武庫川女子大学附属保育園園長 *** 武庫川女子大学附属保育園保育士

真を持ってきてもらい、なぜ選んだのか理由を聞きます。すると撮影者によってさまざまな観点や理由が語られ、そこから保育観があぶり出されます。また写真は、言葉になっていること以上の情報も他者に見えるのがよいところです」⁽¹⁰⁾と指摘する。さらに、研修での学びを保育で実践することで、効果を実感できるとともに、日々の保育の中で試行錯誤する、主体的な姿勢につながると述べている。

秋田（2016）⁽⁸⁾は、写真を用いて限られた時間の中で写真をもとに対話しながら各園の強みを発見し、保育環境をよりよくするための園内研修について提案している。研修の流れは、まず、保育室の環境でいいなと感じたものを写真に撮り、その後、空き時間を利用し、3～4名の小グループでその写真が「なぜよかったのか」「何が学べるか」を話し合う、というものである。写真や映像記録の強みについて、物理的な配置や雰囲気などが伝わりやすい点、撮影者がその時に気付かなかった観点を見出したり、考えたりすることができる点を挙げている。また、写真を撮る視点として、写る時間（特定の出来事、時間に伴う変化、いつもと同じ）、写す対象（特定の子ども、子どもとひとやものとの関係、環境や場）、撮影者の目線（保育者、外部者、子ども）、共有する人（同僚、保護者、子ども）を指摘している。

瀧川（2016）⁽⁹⁾は、保育場面の子どもの様子や保育環境などの写真を用いたアクティブ・ラーニング型の園内研修の手法を整理している。参加者の写真を用いることにより、参加者自身が自らの保育を振り返りながら、主体的な学びが促され、さらに職員同士の協同的な気付きや学びを引き出すことが可能となり、ある保育場面の多様な捉え方が共有できることを示している。

これらの研修の特徴は、保育者自身が保育場面（環境構成を含む）を写真に撮り、話し合いの中でその写真について言語化することで、自らの保育を振り返る、というものである。本論文では、保育者が撮影した写真ではなく、冒頭で述べたように、ビデオ撮影と同様に第三者が撮影した写真を用いた園内研修の方法について紹介する。

2. 写真を用いた園内研修の方法

（1）研修の進め方

保育中に観察者（第一筆者）が保育場面の写真撮影を行う。撮影の視点は、保育のねらい⁽¹¹⁾、担任保育士（第三筆者）から提示された着目点、その他観察者が面白いと感じた場面の3点である。なお、園内研修はおおよそ以下の流れ、内容ですすめた。

①9時10～9時30分；第二筆者（園長）より、当該クラスの保育や特に着目してほしいところに説明を行う。この時、第一筆者は、事前に当該月の指導計画に目を通す。

②9時30分～11時45分；第一筆者が保育場面を観察しつつ、随時写真撮影するとともに記録を行う。

③12時30分～14時前後；第一筆者、第二筆者、第三筆者を中心にカンファレンスを行う。第二筆者が司会・進行を行い、参加者の一名が記録をする。第三筆者である担任保育士より今日の保育の説明を行う。第一筆者は、写真などを交えながら保育について質問、気付いたことを投げ、質疑応答、議論を行う。最後に、第三筆者より、今後の保育の見通し（遊びの展開、環境の再構成、子どもの関わり）について発言する。

④研修後；第一筆者が、写真を編集し、パワーポイントに落とし込んで附属保育園に送付する。

なお、園内研修は5月、7月、9月、1月に各1回ずつ実施した。本稿では、7月の園内研修で用いた写真を提示しながら、研修を紹介する。

(2) 倫理的配慮

武庫川女子大学附属保育園では保護者に対して、大学の研究や研修、授業のために保育園での写真撮影やビデオ撮影を行ったり、それらを発表したりすることを口頭および文書で説明した上で、これらに関する同意を得ている。本論文では写真掲載に対して同意が得られた子どものみ掲載している。また、本論文で掲載される写真については、PhotoScape 3.7 を使用し、個人が特定されないように写真を加工した。

(3) ねらいを視点にした写真

7月のねらいは、①夏の生活の仕方を知り、身の回りのことを自らしようとする、②夏ならではの遊びや自然に触れ、興味や関心をもつ、③好きな遊びを楽しみながら友達とのかかわりを深める、の3点である。このねらいを中心の視点にして観察を行った。なお、研修当日は水遊びはなく、保育室で構成遊びやごっこ遊び、園庭での運動遊びや自由に遊ぶ活動を行っていた。



写真1



写真2



写真3



写真4

写真1は、二人の子どもが栽培物である千日紅に触れている場面である。左側の女兒が興味深そうに千日紅に触れながら「ざらっとしているね」と述べ、右側の男児はその様子を興味深そうに眺めている。この写真を撮影した根拠は、7月のねらいのうち、「夏ならではの遊びや自然に触れ、興味や関心をもつ」に基づいている。さらに、7月の指導計画の先月の子どもの様子の欄に「栽培物に関心を持ち、生長を喜んでいる」と記載があり、連続性を感じたためである。

写真2は、園庭の端に生えていたエノコログサの茎を結んで「できた」と言っている様子である。

写真3もエノコログサであるが、ブラシのように長い穂をむしり取って興味深そうにいじった後、第一筆者に提示している場面である。写真4は、園庭の端に生えていたキノコを右端の男児が見つけ、指さすと他の子どもたちが一緒に見ている場面である。左上の男児が「食べられるかな・・・」とつぶやいたところ、周囲の子どもたちは「食べたらダメ」「食べれる？」「食べたいな」などやりとりが始まった。これらの撮影の根拠は、写真①と同様のねらいに基づく。

カンファレンスでは、第一筆者がこれらの写真を提示し、場面の説明と撮影をした根拠を伝えた上で、こうした自然物に興味・関心を持っている子どもたちの姿が見られるが、今後どのように保育に活かすのか、今後の活動につなげていくのかを投げかけた。

(4) 担任より提示された視点をもとにした写真

A児は他児との関わりよりも、一人で遊ぶことが多く、興味・関心に偏りがあり、気になることが担任である第三筆者から挙げられた。そのため、第一筆者はA児が他児と関わっているか意識して観察した。写真5は、他児とA児と一緒にタイヤを起こそうとしている場面である。園庭で、順番にタイヤ転がしをしており、右側の他児がタイヤを転がしている途中で、タイヤが横転し一人で起こせなかった。第三筆者が「誰か助けて」と声をかけたところ、真っ先にA児がやってきて、一緒にタイヤを起こそうとしている。



写真5



写真6

写真6は、A児がブロックで作ったものを第一筆者に説明している場面である（第一筆者が問いかけたわけではない）。A児は自分のイメージがしっかりあり、それに沿って作ったものを細かく説明していた。

カンファレンスでは、普段写真5のようなA児の姿が見られるのかを第一筆者が問いかけたところ、あまりない姿であることが確認された。このような子ども同士の関わりが見られた時に、どのように保育者が関わっていくのがよいかを話し合った。写真6については、自らの作品を第三筆者に見せたり、説明したりすることはあるとのことだった。そのため、A児が作品を第三筆者に提示した際に、第二筆者より、そこでのやりとりにとどまらず他児に向けて「A児が〇〇を作っているよ」など、A児と他児が関われるきっかけを設けることも必要ではないかという助言があった。

(5) 観察者（第一筆者）が面白いと感じた場面

ここでの第一筆者の視点は、「学びの物語」の視点（子どもが「何かに関心を持つ」「熱中している」「困難に立ち向かう」「自分の考えや気持ちを表現する」「人の立場から見ようとする」）に基づく⁽¹²⁾。写真9は、A児がタイヤ転がしの順番を待っている場面である。この時、A児は、写真7や写真8を見比べていた。写真7の三輪車の車輪や、写真8の自動車の車輪を見て、「あれも同じ」「ホイールが入る」などつぶやいていた。つまり、今、自分が持っているタイヤも含めて、同じタイヤと気付いたのだと推測された。第三筆者から、A児は自動車などの乗り物や機械が好きなため、写真のような気付きにつながったのではないかという気付きがあった。A児は興味・関心に偏りがあるが、このような子どもの興味や関心から、子どもなりの気付きにつながることを、そしてそれをどのように保育や援助につなげていくのかをカンファレンスでは話し合った。



写真7



写真9



写真8

3. まとめと課題

ある程度撮影の視点を定めた上で第三者が撮影した写真を用いて、園内研修を行うことのメリットは2点ある。まず、写真という媒体によって、同じ場面を共有できるとともに、複数の視点からその場面を捉えることができる点である。観察者がある場面について提示しても、保育者や参加者がその場面を認識していない場合、説明だけで時間を取ることになる。写真を通せば、一目で同じ場面を共有できるため、カンファレンスが進めやすくなる。そして複数の視点から捉えるというのは、多様な解釈が生じることでもあり、それに触れることで保育士の保育の見通しや学びの深化にもつながると考えた。

次に、写真も記録として残せる点である。園内研修で学んだことを文字化することは重要であるが、そこに写真を添えることで振り返りがしやすくなると思われる。後で保育士が見直すことで、異なる視点や解釈が生まれ学びが深める可能性もある。さらに、写真があれば、カンファレンスに参加できなかった職員から後で異なる視点で感想や意見を求めることができる。

今後の課題は、園内研修の効果、特に保育士の学びの評価である。写真を用いることのメリットを述べたが、今回の園内研修では、観察者である第一筆者のみの写真を用いた。視点をある程度定めているとはいえ、その後の保育にどのように活かされたのかまでは検証できていない。そのため、研修までに保育士自身が撮影した写真と、園内研修当日に撮影したものと突き合せながらカンファレンスをしたり、園内研修後に保育士自身が撮影した写真をそれらと突き合せて自己評価したりすることを導入しても効果があると考えている。また、園長なども保育観察の段階から参加してもらい、写真を撮り、複数の視点で撮影された写真を用いるやり方も考えられる。

今回提案した方法は、進行したばかりであり、改善や検討の余地が多い。よって、今後さらに、先行研究や保育現場での意見を取り入れつつ、より園内研修の方法を確立したい。

注・引用文献

- (1) 2016年8月26日にCiniiで「園内研修」で検索したところ132本の文献が該当したが、2010年以降の文献が65件と約半数を占めていた。2000年～2009年で55本であった。
- (2) 平山園子「園内研修における保育者の成長：保育カンファレンスの有効性の検討」『日本保育学会大会研究論文集』48, 1995, pp.666-667.
- (3) 福崎淳子・小河原恵津子・小野寺富美子・鈴木君栄「保育におけるエピソード記憶から読みとる保育者の気づきと学び合い—人的環境に視点をあてた園内研修の試みから—」『東京未来大学研究紀要』5, 2011, pp.111-121.
- (4) 原孝成「インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす効果」『鎌倉女子大学紀要』21, 2014, pp.43-54.
- (5) 岸井慶子『見えてくる子どもの世界—ビデオ記録を通して保育の魅力を探る』ミネルヴァ書房, 2013.
- (6) 岸井慶子「園内研修」日本保育学会編『保育学講座④保育者を生きる—専門性と養成』東京大学出版会, 2016, p.53.
- (7) 岡健「園内研修が活性化するための三つのポイント」『これからの幼児教育』春号, 2013, pp.2-5.
- (8) 秋田喜代美『秋田喜代美の写真で語る保育の環境づくり』ひかりのくに, 2016.
- (9) 瀧川光治「写真を活用した保育の振り返りと園内研修の手法の提案」『大阪総合保育大学紀要』10, 2016, pp.287-297.
- (10) 岡健, 前掲論文, p.4.
- (11) 武庫川女子大学附属保育園では、週の指導計画を作成していないため、月の指導計画に基づいて園内研修を実施した。
- (12) 大宮勇雄『学びの物語の保育実践』ひとなる書房, 2010.

参考文献

- (1) 及川留美・小野崎佳代・福崎淳子・西村実穂・坂本晴代・楠敦子「現場と大学との協働による園内研修の試み」『東京未来大学研究紀要』9, 2016, pp.191-200.
- (2) 上田敏丈「保育環境の中に見る保育者の専門性」『発達』134, 2013, pp.28-33.
- (3) 請川滋大・高橋健介・相馬靖明編著, 利根川彰博・中村章啓・小林明代『保育におけるドキュメンテーション』ななみ書房, 2016.
- (4) 矢萩恭子「幼稚園における保育の質と評価の問題：ビデオカンファレンスによる園内研修から考える」『研究紀要 第一分冊 人文学部（聖徳大学）』17, 2006, pp.71-78.